

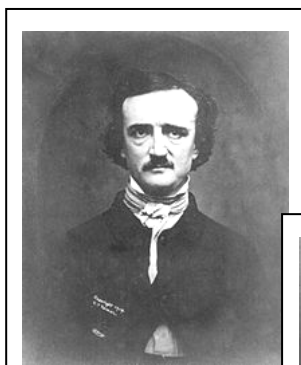
第1回 本格ミステリの誕生

～ポー ドイル フリーマン チェスタトン～

第1回は、本格ミステリの誕生から1910年代までの4人の作家を紹介します。

1. 本格ミステリの創造主—エドガー・アラン・ポー（ポオ）
2. シャーロック・ホームズの生みの親—アーサー・コナン・ドイル
3. 倒叙推理小説の形式を作った—R. オースティン・フリーマン
4. 逆説の達人—G. K. チェスタトン

4人それぞれの代表作を見ながら、ミステリの歴史を紐解いていきます。



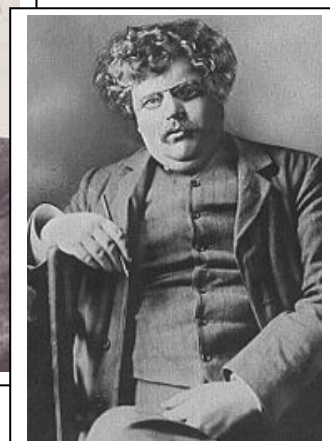
エドガー・アラン・ポー



コナン・ドイル



オースティン・フリーマン



G・K・チェスタトン

1. エドガー・アラン・ポー（1809-1849、アメリカ）

1841年4月、世界初のミステリ（ミステリー、推理小説、探偵小説ともいう）が誕生した。今から約170年前のことである。生みの親はアメリカの怪奇幻想作家兼詩人のエドガー・アラン・ポー。作品は「モルグ街の殺人」と題する一短編であった。

○「モルグ街の殺人」（『黒猫/モルグ街の殺人』★933ポ 光文社

／『ポオ小説全集3』★933ポ3 東京創元社）



【内容】フランスのとあるアパートで金持ちの婦人とその娘が惨殺された。ドアに内側から鍵がかかったいわゆる「密室殺人」であった。この事件の概要を新聞で読み興味をもった名探偵オーギュスト・デュパンは、事実を論理的に分析して推理を重ねていく。そしてついには誰も想像もしなかったような驚愕の真相にたどり着くのだ。

ここにはミステリが必要とする基本的な形式がすべて備わっている。

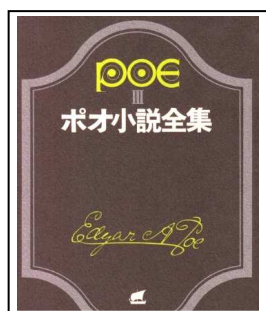
- ①冒頭に提示される不可解で魅力的な謎。
- ②それを論理的に解明していく名探偵の推理。
- ③最後に明かされる意外な解決。

ちなみにこのように①から③の要素をすべて備えたミステリの基本形に沿ったスタイルを、特に「**本格ミステリ**」とか「**本格物**」と呼ぶ。

これまでは怪奇な現象が怪奇なまま終わる小説を書いていたポーだが、なにゆえ怪奇を合理的に説明する小説を書こうと思ったのか。天才作家の頭の中をのぞいてみることはできないが、彼のこの発想がなければ、ミステリというジャンルそのものが存在していなかったか、さもなくば存在していたとしても全然別個のものになっていたことだろう。というわけで、ポーはミステリにとっての創造主であり大恩人なのである。

ポーはこの後、ミステリをそれほど多く書いたわけではない。厳密な意味でミステリとよべるものは、デュパン物の3作（○「モルグ街の殺人」、○「盗まれた手紙」、○「マリー・ロジェの謎」（◎『ポオ小説全集3』）と非デュパン物の○「黄金虫」（『ポオ小説全集4』）、○「お前が犯人だ」（『ポオ小説全集4』）の計5作（すべて短編）のみである。その中で特筆すべきは隠し物トリックを創始した「盗まれた手紙」であろう。

○「盗まれた手紙」（『ポオ小説全集4』★933ポ4 東京創元社）

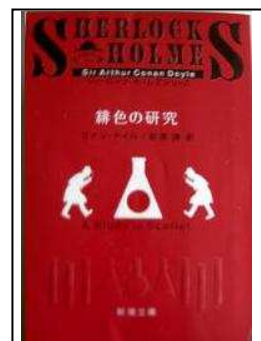


【内容】ある重要な書類が盗まれた。犯人はわかっているし、その書類が存在している部屋もわかっている。けれども、いくら家探しをしても書類が見つからないのである。依頼を受けたデュパンは、人間の盲点を大胆についた意外な隠し場所を指摘し、見事書類を発見するのである。

ポーは本作において、人間が無意識にもっている先入観や思い込みを利用することで、充分効果的に意外性を演出できることを実証した。ちなみにこの原理を「**盲点原理**」といい、今後多くの作家たちがこの原理に基づいて、数多くの傑作を生み出していくことになる。

2. アーサー・コナン・ドイル（1859-1930、イギリス）

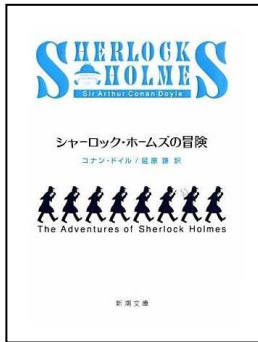
ポーがアメリカでミステリを産み出してから約50年後、海を隔てたイギリスで史上最も有名な名探偵が誕生した。その名は**シャーロック・ホームズ**。生みの親はアーサー・コナン・ドイルで、はやらない町医者であったドイルが暇にあかせて書いた一長編◎『**緋色の研究**』（★933ド 新潮社）がデビュー作であったが、この長編はさほど評判にならなかった。しかし、のち雑誌に連載した一連の短編で一気に大評判となる。この名探偵は明らかにオーギュスト・デュパンの影響を受けているが、デュパンよりも一層個性を強くしたのが成功の秘訣だろう。ホームズは麻薬中毒者であり、日常生活では破綻者といえるほどのダメ人間であるのに、こと推理となると突如その天才ぶりを発揮する。その個性的なキャラクターは、多くの熱狂的なファンを生み出すことになる。また記述者を務める凡庸なワトソンの起用も、ホームズの天才を対比させるグッド・アイデアであった。



◎『シャーロック・ホームズの冒険』（1892年）（★933ド 新潮社）

全作品中、最も充実したラインナップを誇る短編集は、第1短編集の『シャーロック・ホームズの冒険』である。密室物の○「**まだらの紐**」、奇妙なアイデアに満ちた○「**唇の曲がった男**」などの名作群の中で、最も優れているのが○「**赤髪連盟**」（「赤毛連盟」「赤毛組合」）であろう。

○「赤髪連盟」



【内容】ただ髪が赤いという条件だけで破格の仕事を与えられた男の奇妙な物語である。ただ毎日事務所に出かけていき事典を書き写すだけで、高額報酬が与えられる。しかし突如何の予告もなく契約をうち切られたことで途方に暮れた男が、ホームズに相談しに来るのである。ホームズはこの奇妙なもうけ話の裏に隠された巧妙な犯罪計画を見事に見破るのだ。

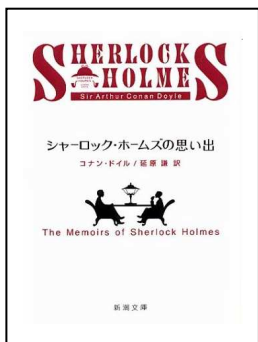
その奇抜な発想は見事としか言いようがない。冒頭の謎は一見犯罪とは縁がなさそうなものなのに、ちょっと視点を変えただけで、まったく違った犯罪計画が見えてくるのである。これぞミステリにおける意外な真相のお手本である。作家自身も快心の出来だったのであろう、この後同様のアイデアを何度も使い回している。

ホームズ物は本格ミステリとしてだけで見ると意外と当たりはずれが大きく、代表作といわれる『シャーロック・ホームズの冒険』の中にすら駄作が散見される。ドイル自身ホームズで有名になったことが嫌でしやうがなかったらしく、第2短編集◎『シャーロック・ホームズの思い出』の最終話○「最後の事件」でホームズを一旦葬っているのである。しかしファンからの強い要望に押されて結局第3短編集◎『シャーロック・ホームズの帰還（生還）』（★933ト 新潮社）の第1話○「空屋の冒険」で復活させざるを得なくなる。しかしこれ以降の作品は嫌々書いているのが明白で、駄作の割合が一段と高くなる。

◎『シャーロック・ホームズの思い出（回想）』（『回想のシャーロック・ホームズ』） (1894年) (★933ト 新潮社)

さて、そんな中でホームズ物の最高傑作は『シャーロック・ホームズの回想』の冒頭を飾る「白銀号事件」（「銀星号事件」「名馬シルヴァーブレイズ」）であろう。

○「白銀号事件」



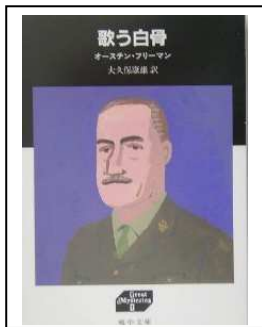
【内容】来るウェセックス・カップの本命馬、シルヴァーブレイズが行方不明となった。そして、その馬の調教師が、頭を砕かれ死んで発見された。ホームズの推理は競馬開催当日に明らかとなるが、犯人は意外なところに・・・。

競走馬の失踪と調教師の殺害事件の謎を追うホームズ。足跡等の手がかりから進められる推理は緻密で、ラストの意外性に至るまで一点のスキもない。ホームズの名せりふ「犬が鳴くのではなく、鳴かなかったことが重要だ。」が出てくるのもこの作品である。正直言って、いつもは直感に頼った思いつきのような推理が目立つホームズだが、この作品ではまるで別人のように理にかなった推理を進めている。そのレベルは、後に黄金期とよばれる本格ミステリが頂点に達した時代の名作群に匹敵すると言ってよい。

3. R（リチャード）・オースティン・フリーマン（1862-1943、イギリス）

ホームズに遅れること20年、イギリスにホームズのライバルとして科学者探偵ソーンダイク博士が誕生した。ホームズの推理はややもすると都合が良すぎて論拠に欠けるきらいがあるのに対して、ソーンダイク博士の推理は常に証拠を科学的に分析する実証的なもので、信頼感にあふれている。時代が時代だけに、その科学理論は現在では古びて見えるところもあるが、根底にある科学精神は、時代を越えたものがある。そこに不変の面白さがあると言えよう。

◎『歌う白骨』（1912年）（★933オ 嶋中書店）



ソーンドイク博士の科学的推理が堪能できる傑作短編集である。全5作のうち4作が「倒叙（とうじょ）物」というのが、最大の特徴である。倒叙物とは犯人の側から描くミステリの形式であり、フリーマンによって創始されたものである。テレビドラマ「刑事コロンボ」や「古畑任三郎」でおなじみといえわかりやすいだろう。この形式では、犯人の正体も犯行方法もあらかじめ読者に提示される。そのため、一見すると何が面白いのか理解しがたいところがあるのだが、この形式をとるがために、かえって探偵の推理の過程が手に取るように分かり、知的興味をかき立てられるのである。

○「オスカー・ブロズキー事件」

【内容】 実話をモデルにしている。ダイヤモンドを職とする男の家へオスカー・ブロズキーという有名なダイヤモンド商人が偶然に道を訪ねてくる。一時的精神の錯乱を伴い、男はブロズキーを殺しダイヤモンドを手に入れる。しかし、ソーンドイク博士は男の仕掛けを見事に見破るのだ。

この短編集『歌う白骨』の中での最高傑作は、史上初の倒叙物となった「オスカー・ブロズキー事件」である。ダイヤモンド目当てのために、列車事故に見せかけて卑劣な殺人を行った犯人の偽装工作に対して、ソーンドイク博士がいちいち証拠を科学的に吟味しながら、真相に迫っていく。犯人が（そして読者も）見落としていたミスが、科学捜査によって次から次へと暴かれていく過程がゾクゾクするほど面白い。

4. G. K（ギルバート・キース）．チェスタトン（1874-1936、イギリス）

最後にホームズと対極をなす、名探偵をもう一人紹介しよう。小柄で人の良さそうなカトリックの聖職者であるブラウン神父である。ブラウン神父は始終忘れ物をしたり、一見訳のわからないたわごとを連発したりして、周囲から馬鹿にされている。しかしその実、その鋭い観察眼から事件の真実を一瞬で見抜き、たわごとと思われていた言葉がすべて重要な意味を持っていたことが分かるのである。作者のチェスタトンは、文芸批評でも有名な人だけに文体は格調高く、一見馬鹿馬鹿しく見えるようなトリックも彼の手にかかると、不思議に説得力が感じられるのである。さらに常識とは正反対の考え方（これを「逆説」という）ですら、チェスタトンの手にかかると、読者はこちらの方が正しいように思わされてしまうのだからさすがである。

◎『ブラウン神父の童心』（1911年）（★933チ1 東京創元社）

ブラウン神父が活躍するのはすべて短編で、5冊の短編集にまとめられている。中でも第1短編集にあたる『ブラウン神父の童心』は、傑作ぞろいの作品集である。ここでは、ブラウン神父が足音を聞いただけで巧妙な盗難計画を見破ってしまう○「奇妙な足音」や、逆説を利用した死体隠し場所トリックが秀逸な○「折れた剣」あたりが代表作だが、特に全ブラウン神父物の中でも最高傑作との呼び声が高いのが「見えない男」である。



○「見えない男」

【内容】 ある男が再三脅迫状を受け取った。しかし、誰がそれを届けたのか誰もその姿を見たものはいなかった。その「見えない男」はいつも大勢の目の前を堂々と通って脅迫状を届けているようであった。そして、しまいには大胆不敵にも、人を殺し死体さえ持ち去ってしまった。ブラウン神父はいみじくも、事件のトリックを見破ってしまった。

犯行現場に出入りした犯人は誰の目にも見えていたはずなのに、誰もが見なかったと答える。

どうしてこんな奇妙なことが起こったのか。ブラウン神父は人間の心理の盲点を指摘し、鮮やかに真相を解き明かすのであるが、これはポーが『盗まれた手紙』で創始した「盲点原理」を巧みに応用したものである。

私の一押し!!

このコーナーは、各回のテーマに関して、一般的には特に評価が高い作品ではないものの中から、私が個人的にお勧めしたい作品を紹介する。

○「マーン城の喪主」（『ブラウン神父の秘密』（1927年）所収 ★933チ4 東京創元社）



【内容】 森の中そびえ建つマーン城。マーン公爵には、まるで弟のように可愛がっていた、いとこのモーリスがいた。モーリスの死後、公爵は世を嫌い城にこもりきりで生きているとも言われている。このことの真相を知りたいと思う人々の行動をなぜかブラウン神父は止めようとした。そこには隠された真実があり、聖職者であるブラウン神父は…。

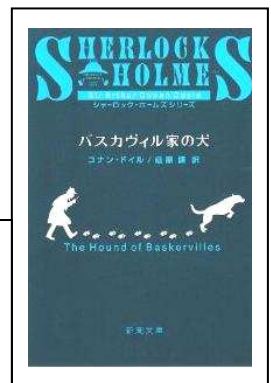
私にとって、国語教師に読ませたいミステリの筆頭に挙げたい作品である。最近ではそういうことも少ないのだろうが、私が学生の頃の国語教師の中には、「ミステリは文学ではない。」などと称して、露骨に見下す人が多かった。そんな人に、文学的な感動を与えてくれるこの作品を是非お勧めしたい。

この作品のテーマは「罪の許し」である。あるやむをえない事情から決闘を行った結果、相手を死なせてしまった男が主人公だ。世間は彼の行為をむしろ名誉あるものとして好意的に受け止めていたのだが、ブラウン神父は「罪の許し」とはそんなに簡単なことではないと執拗に主張するのである。この作品で本当に解かれるものは事件の真相ではなく、読者自身の狭量さであるといえる。ブラウン神父によって自らが知らず知らずのうちにかぶっていた偽善という名の仮面を情け容赦なくひっぺがされる瞬間は、読者自身が心の痛みを感じることなく受け止めることは難しいことだろう。深い感動と重い余韻を残す一編である。

それでは最後に、本稿で紹介しきれなかったこの時代（誕生から 1919 年まで）の代表的な作品として、長編と短編集それぞれ 5 作ずつをキャッチコピーとともに挙げておこう。

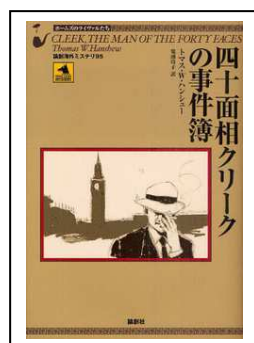
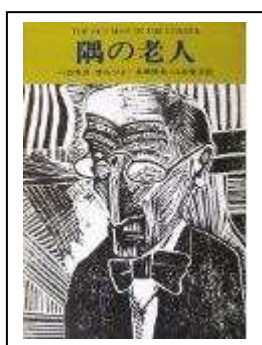
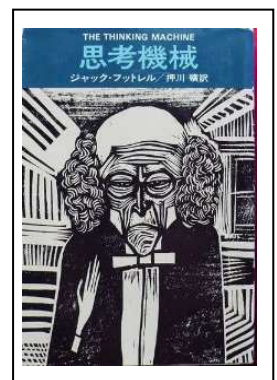
○ 長編

1. 『月長石』（ウィルキー・コリンズ）（1868、イギリス）（★933コ 東京創元社）
～最長にして最良のイギリス本格の原点～
2. 『ビッグ・ボウの殺人』（イズレイル・ザングウィル）
（1892、イギリス）（★933ザ 早川書房）
～密室トリックとフェア・プレイ精神の萌芽～
3. 『バスカヴィル家の犬』（コナン・ドイル）（1902、イギリス）（★933ド 新潮社）
～ホームズ物の長編、謎解きより怪奇趣味重視～
4. 『黄色い部屋の謎（秘密）』（ガストン・ルルー）
（1908、フランス）（★933ル 東京創元社）
～史上最高の密室トリック、フランス本格の最高峰～
5. 『トレント最後の事件』（E. C. ベントリー）
（1913、イギリス）（★933ベ 東京創元社）
～黄金期本格長編の先駆～



○短編集

1. 『思考機械』 (ジャック・フットレル)
(1907、アメリカ) (★933 フ 早川書房)
～不可能を可能にしてしまう超天才探偵～
2. 『怪盗紳士ルパン (リュパン)』 (モーリス・ルブラン)
(1907、フランス) (★933 ル 早川書房)
～怪盗ルパン物も短編は意外と本格～
3. 『隅の老人』 (バロネス・オルツィ) (1909、イギリス)
(★933 オ 早川書房)
～正体不明の謎の安楽椅子探偵～
4. 『四十面相クリークの事件簿』 (トマス・W・ハンシュュー)
(1910、アメリカ) (★933 ハン 論創社)
～変装の達人の元怪盗は今では名探偵～
5. 『アンクル・アブナーの叡智』 (M. D. ポースト)
(1918、アメリカ) (★933 ポ 早川書房)
～アメリカ開拓時代の名探偵はアメリカの良心～



第2回は、7月予定。

次回は、インタビュー「なぜミステリが好きなのか?」、も掲載予定!

- 【注】 1.◎『』で表したものは、当時あるいは現在でも出版されている本の書名です。
○「」は、小説の題名です。
2.★で表したものは、習志野高校図書館が所有している本です。NDCも表記します。
3.小説の内容については、書体を違えています。

2012.05.11 連載開始